

学校の祝祭についての考察：学芸会と昭和期の童謡

著者	佐々木 正昭
雑誌名	教育学論究
号	創刊号
ページ	31-40
発行年	2009-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10236/3625

学校の祝祭についての考察

— 学芸会と昭和期の童謡 —

Notes on School Festivities

— Gakugeikai and Songs for Children in the Showa Era —

佐々木 正 昭*

Abstract

Gakugeikai became very popular at many elementary schools in the late Taisho Era because dramas began to be played at Gakugeikai satges. In the early Showa Era Gakugeikai became one of the greatest entertainments of villages and it came to be performed at the end of the school year because it was the best time for village people. In the early Showa Era the record industries also arouse and they published many songs for children and these songs became popular among children. At Gakugeikai stages children liked to sing these new songs for children, adding to many songs for children which were already composed in Taisho Era. But after the Conflict between Japan and China at the year of 1937, pupils were gradually forced to sing militant and nationalistic songs instead of these songs for children and under the war time Gakugeikai itself was sometimes canceled. It was only after the World War II when the programs of Gakugeikai were again full of attracting dramas and the songs for children at every elementary school in Japan.

キーワード：学校の祝祭、学芸会、童謡、昭和期

はじめに

学芸会は、明治40年代から大正時代初期に、その名称が定着して学校行事として全国の小学校に広がり始めるが、学芸会が飛躍的に普及するのは、大正半ばから始まった学校劇の上演による。従来は、教科の発表もしくは朗読、唱歌、談話などを中心とした学習成果の発表会であった学芸会が、学校劇の導入によって、児童中心主義教育と芸術教育重視の当時の風潮ののって、児童の自主的、総合的表現活動として脚光を浴び始めたのである。華やかで、娯楽的な要素のある学校劇中心の学芸会は、人々の関心を集め、従来は不定期的開催で規模も小さかった学芸会が、定期的、計画的、大規模なものになり、それにつれて保護者の参加も増え、ついには、学芸会を2日、さらには3日にわたって開催する学校も出現するようになった¹⁾。ところが、大正13(1924)年8月に岡田良平文部大臣が、地方長官会議におい

て「教育上ノ新主義ヲ鼓吹スル者」に対する監督強化と学校での演劇などの各種会合における華美や行き過ぎを警告したことから、一時期、学芸会での劇の上演は、すっかり影をひそめ学芸会も元気がなくなった。しかし、学校劇は、国語読本の劇化や地理や国史の教材の劇化という形で復活し始め、とくに文部省の統制を受けなかった一部の私立学校の熱心な学校劇上演活動などが起爆剤となって、やがて広く公立学校にもいきわたるようになり、昭和の初めには大正期よりもはるかにひろく全国に普及した²⁾。このような経緯から、学芸会が運動会とならぶ小学校の重要な行事となるのは、昭和期に入ってからのことである。学芸会の学校行事としての定着は、このように学校劇と深く関わっているが、学校劇については別稿に譲り、本稿では、昭和期初期から第2次世界大戦敗戦までの学芸会の普及と盛衰の過程を童謡との関連において述べる。

* Masaaki SASAKI 教育学部教授

1) 神戸市教育史編集委員会編『神戸市教育史』第1集、神戸市教育史刊行委員会発行、昭和41年（以下『神戸市教育史』と略）、579頁。

2) 富田博之『学校劇運動史』（教育文化史大系V）、昭和29年、金子書房、112頁。日本学校劇連盟編『学芸会の事典』、厚徳社、昭和29年、30頁。

1 学芸会の定着と普及

学芸会は毎年の定まった時期での実施とともに、時々記念すべき機会での実施によって普及する。次にその双方の事例をあげる。

(1) 定期的な学芸会の始まりと普及

①定期的な学芸会

学芸会の定期的実施は、早くは明治後期に記録があり、大正期にも記録がある。「演習会（＝学芸会）は毎学期に1回これを開く」（明治36年、長野県の城山尋常高等小学校校則）、「学芸会ニ関スル規程」（第2条 学芸会ハ各学級各別ニ或ハ尋常科高等科各別ニ数学級聯合シ又ハ全校合同シテコレヲ行フモノトス、其回数ハ凡ソ左ノ如シ、／各学級 1ヶ月1回、凡2時間／数学級1学期1回、凡2時間／全校 1学期1回、凡2時間）（明治41年、長野県上水内郡下小学校標準一校務教授訓育ニ関スル調査）³⁾「第50条 学芸演習会ニツキテ定ムル所次ノ如シ／1 毎学期末全校児童ヲ集メテ学芸演習会ヲ開ク、但シ記念日等ニ於テ臨時開会スルコトアルベシ（文中の斜線は改行を示す）」（大正5年、上伊那郡飯島尋常高等小学校「校則」中「学芸演習会」）⁴⁾、「その当時は（大正10年ごろまで）年に2回、春と秋に大学芸会があり、毎学期毎に小学芸会があったのです。」⁵⁾

しかし、以上のような学芸会の定期的な実施は、明治後期はもちろん大正10年までのものでも先駆的な事例であることが、次の一連の京都市の公立小学校の記述から分かる。「大正5年の「教育要覧」には学芸会のことは記載されず、昭和5年の「教育要覧」に記載されていることから、（学芸会は）大正後期から昭和にかけての頃に実施されていたのではないかと考えられる。（京都市立日彰小学校）⁶⁾「2月の第2金曜日に1、2、3年の学芸会、第3

金曜日に4、5、6学年の学芸会を実施、11月にも、第2金曜日に幼年部学芸会、第3金曜日に高年部学芸会を実施」（京都市立淳風小学校、大正期の学年暦）⁷⁾「校長の高市先生は、（略）展覧会、運動会、学芸会を3大行事とし区民と共に楽しむ機運を作ったので、校長は代わっても永くその機構が受け継がれたのでした（昭和5年から17年まで京都市立出水校に勤務した元教員の回想「出水校の思い出」）⁸⁾。事実、これを裏付けるように、昭和初期になると、学芸会の定期的実施の記録や行事規程、学校要覧などへの学芸会の記載が多く見られる。「大学芸会－創立記念日、小学芸会－6月下旬、年2回の定期的開催」（昭和3年、京都市立春日小学校〔学校一覽〕）⁹⁾「行事規定 第3条 学芸係ハ教務係ノ指導ノ下ニ、毎月小学芸会、成績品展覧会ヲ行ヒ、1年1回以上大学芸会及義士会等ヲ開ク」（昭和5年、京都府久美浜町立川上小学校）¹⁰⁾「（大学芸会は）毎年3月上旬に行う。2日間で、1日目は児童のために、次日（日曜）は保護者のために行う。午前9時から午後3時まで。各学年の配当時間、4年以下各学級20分、5年以上各学級25分以内、種目 劇（昭和8年、京都教育大学教育学部附属桃山小学校「改正 附属小学校要覧」）¹¹⁾。

以上のように昭和に入ってから、多くの学校で学芸会が定着しているのが分かるのであるが、次にとくに年1回行われる「大学芸会」が、年中行事として実施される主な時期を見てみよう。

②年中行事としての大学芸会の時期

a 節句（とくに雛祭）

節句を学校行事として祝うことについては、京都市立の小学校で、明治43年、明治44年、大正4年の3月3日に女子雛祭学芸会が、明治44年、大正4年の5月5日に男子端午節句会が行われた記録がある（京都市立竹間小学校）¹²⁾。また大正10年ごろに、千

3) 長野県教育史刊行会編集・発行『長野県教育史第6巻 教育課程編3』昭和51年、921-92頁（以下、『長野県教育史』と略）。駒込幸典『信州 教育事始め』信濃毎日新聞社、平成11年、74頁。

4) 『飯島町学校教育百年史』、『長野県教育史』922頁。

5) 京都教育大学附属京都小学校編集・発行『子どものための附属百年誌』144頁。

6) 京都市教育委員会編集・発行、閉校記念誌『日彰一輝ける124年のあゆみー』（以下『日彰』と略）平成9年、42頁。

7) 淳風校史編纂委員会「淳風校百年史」淳風校創立百周年記念事業委員会発行、昭和44年、129-132頁。

8) 出水校百年祭記念事業実行委員会発行編集・発行『出水校百年史』昭和44年、325頁。

9) 京都市教育委員会編集・発行、春日小学校閉校記念誌『春日一輝ける126年のあゆみー』（以下『春日』と略）平成9年、37頁。

10) 「川上小学校と川上村の沿革」53頁、京都府久美浜町立川上小学校創立百周年記念祭典実行委員会発行『沿革史』昭和50年。

11) 京都教育大学教育学部附属桃山小学校編・発行『京都教育大学教育学部附属桃山小学校80周年記念誌』昭和63年、136頁。

12) 京都市育委員会編集・発行、閉校記念誌『竹間一輝ける124年のあゆみー』平成9年3月、31頁。

葉師範学校附属小学校において、「雛祭」「武者祭」「星祭」「菊祭（11月3日）」に「学校節句」が行われている¹³⁾。しかし、学校節句の必要性が説かれ、普及するのは昭和期に入ってからである。事例をいくつかあげる¹⁴⁾。「武者祭（端午会）でお話や唱歌を歌う」（昭和7年、埼玉県不動岡小学校）、「七夕祭、7つの童謡と6つの合唱から成る24番組」（昭和7年、埼玉県の小学校）、「雛祭（上巳の節句）、武者祭（端午の節句）、七夕祭の開催。武者祭には軍歌会や小学芸会実施、雛祭、七夕祭では、お話会や唱歌、小学芸会の実施」（昭和8年から昭和14年まで小田第1小学校）、「雛祭にお話や唱歌を歌う」（昭和10年、埼玉県師範附属小学校）、「雛の節供をトして本校創立60周年記念学芸会を開催された」（昭和11年、兵庫県御影師範学校）、「七夕祭を兼ね保護者を招待した学芸会の開催」（昭和12年、埼玉県女師附属）、「ひなまつりの日に新校舎2階3教室をぶち抜いて学芸会を開く」（昭和12年、蕨北小学校）。

b 地久節（皇后の誕生日、国家の祝日扱い）

地久節には、これを母の日（当時皇后は国母の位置にあった）として学芸会が明治期から行われている。明治期の地久節は、5月28日だったが、昭和期は3月6日であった。例えば、京都市立明倫小学校の記念誌には、「昭和13年3月6日、地久節、此頃大学芸会、地久節の祝意をかね卒業生を送る意味で行ふ¹⁵⁾」とある。また、米子の明道小学校は、地久節の3月6日を「母の日」と定め、その後毎年この日を母の日にあてている。当日は児童各自が、いろいろな計画をたててできるだけ喜びと楽しみとを母に捧げ、少なくとも母の手助けはする。（略）学校でも、母を招待し、母のための学芸会（午前11時から午後1時まで）や、母への献げ物の展覧会（午後1時から午後4時まで）などを催している¹⁶⁾。

c 学校の創立記念日

学校の創立記念日に定期的に学芸会を行った例もある。「大学芸会—創立記念日、小学芸会—6月下旬、年2回の定期的開催」（京都市立春日小学校¹⁷⁾。

d 天神祭

「学芸会！学芸会！十数年ぶりに復活した本校年中行事の一つで、1月25日（昭和10年）の菅原道真公を偲ぶ天神の意義ある日に、講堂新築落成披露を兼ねて行われた」（小田原第一尋常高等小学校¹⁸⁾。

(2) 不定期的な学芸会

学芸会が定期的に行われる一方で、学芸会は祝い事や記念日などに実施されている。その主な事例を見てみよう。

① 国家・皇室の祝賀や皇族来校時の歓迎行事

a 昭和天皇御大典奉祝行事

昭和期に入って最大の国家行事にして皇室祝賀行事は、昭和3年11月10日の御大典であった。この祝祭行事として「奉祝式」を中心に「奉祝学芸会お伽会奉祝狂言等」が、「学校生徒児童青年団在郷軍人会合同奉祝運動会」「奉祝生徒児童成績品展覧会」などとともに行われた例がある。また「奉祝町内各小学校連合音楽表現会」も行われている¹⁹⁾。小学校単位の学芸会の事例としては、京都市立初音小学校で、昭和3年11月24日に昭和天皇の「御大礼奉祝学芸会」が行われ、午前中は児童が観覧、午後、高齢者を招待しての一般保護者の部が開催されている²⁰⁾。

b 皇紀2600年の祝賀

昭和15年11月10日に皇紀2600年の奉祝式が行われているが、これに関連して奉祝学芸会が行われている。事例としては、「昭和15年2月18日、皇紀2600年

13) 手塚岸衛『自由教育真義』大正11年、193頁（復刻版、教育名著叢書9、日本図書センター、昭和57年）、また、同書192頁に「(10) 雛祭 最初尋3女の自治會が施行したるに起源し、遂に學校節句として全般的學校行事となれり。」とある。

14) 以下の事例は、次の書からの重引である。山本信良・今野敏彦『大正・昭和教育の天皇制イデオロギー（Ⅱ）』（以下山本・今野『Ⅱ』と略）昭和52年、192頁ならびに244-245頁。

15) 京都市立明倫小学校発行『明倫誌第2編』昭和45年、427頁。

16) 山本・今野『Ⅱ』、200-201頁。

17) 『春日』37頁。

18) 『(小田原第一尋常高等小学校)校報』第7号、昭和7年3月24日、56頁。山本・今野『(Ⅱ)』、192頁。

19) 山本信良・今野敏彦『大正・昭和教育の天皇制イデオロギー（Ⅰ）』（以下山本・今野『Ⅰ』と略）、新泉社、昭和51年、197-199頁。

20) 閉校記念誌『初音—輝ける124年のあゆみ—』（以下『初音』と略）京都市教育委員会編集・発行、平成9年、48頁。

奉祝学芸会並ニ保護者会」(徳島県撫養小学校)²¹⁾。

c 皇族の学校訪問記念日

京都市立初音小学校では、昭和11年11月12日から14日までの3日間、明治天皇のご来校60年を記念して敬老会や口演、映画会などの記念行事が催され、その2日目に祝賀の「児童学芸会」が行われている²²⁾。

d 皇太子の誕生祝日

皇太子の誕生記念日にも学芸会が行われている。昭和10年12月20、21日に、東京関口台小学校で、皇太子生誕1周年記念学芸会が開催されている²³⁾(皇太子の誕生は昭和8年であるのでこの学芸会の実施は昭和9年であろう)。

③ 教育勅語の渙発記念行事

大正・昭和期には、教育勅語の渙発記念行事に伴って学芸会が行われている。例えば、昭和5年の教育勅語御渙発40周年には、記念式を挙行了した後、記念行事として卒業生を交じた学芸会や講演会を開催した例がある²⁴⁾。

④ 学校記念日

創立10周年記念などの各学校の区切りの創立記念日においても、式典、運動会、展示会とともに学芸会が数多く行われている。

⑤ 校舎の落成式

上述の(1)の②のd天神祭の事例など。

⑥ その他、神戸市独自の学芸会

a 大楠公600年祭

昭和期になって国体明徴論が盛んになり、日本精神涵養の叫びが高まるにつれて、神戸市では「楠公精神を欽仰し国民精神を作興す」(昭和11年神戸市教育綱領第1項)として、これを神戸市の教育の中心目標とするようになる。神戸市では昭和10年5月に「大楠公600年祭」を行い、各小学校では記念行

事の中に記念体育会とならんで展覧会と学芸会を行っている²⁵⁾。

b 国際交流

神戸市の教育会や小学校では、次のような国際交流の交歓学芸会を機会あるごとに開いている。昭和7年神戸市教育会、満州国学童使節を迎えて北野小学校において歓迎学芸会を開催。昭和13年4月、須磨尋常小学校において神戸入港のイタリア海兵200余名を招待して、歓迎運動会とともに歓迎学芸会を開催。昭和15年6月、北野小学校家庭会、中華同文学校生徒を、17年11月池田小学校はドイツ小学校生徒150名を招いて交歓学芸会を開催(いずれも各校単位の取り組み)。昭和15年11月16日、神戸市教育会、北野小学校に中華同文学校生徒を迎え、日華親善交歓学芸会を開催、以後、毎年1回継続実施²⁶⁾。

以上の事例で分る通り、昭和初期には、学芸会は、子どもの様子や学校教育の成果を保護者に披露するだけでなく、国家・皇室の記念行事や節句を児童と保護者がともに祝うことを通して、国民としての一体感と愛国心ならびに皇室への崇拜の心を育成する手段となった。従来補助的な役割に過ぎなかった学芸会がここへきて重要視されるようになったのであり、これが学芸会がこの時期に興隆した原因である。そもそも節句は、明治6年、従来の民衆の祝日だった5節句を廃止して、天皇と神道中心の国民の祝日を設定したことから、学校教育で重視されることはなかった。ところが、文部省は、昭和4年9月、国体観念を明徴にして国民精神を作興することと経済生活の改善を図り国力を培養することの2大要項を掲げてその普及徹底のために、全国いっせいに教化総動員を実施することとした(文部省「教化動員ニ関スル件」を訓令)。さらに、文部省は、教科の教授においては、訓練と相まって情・意の陶冶を重んじ、国民思想の健全な発達を期することとし、特に修身・国史・国語・地理を中心として、国体観念の養成に関する教材を重視して取り扱い、その資料として必要な時事材料・郷土的材料をじゅうぶん活用することとした²⁷⁾。このような国民精神作

21) 『撫養小学校沿革史』269-277頁、山本・今野『I』、232頁。

22) 『初音』、49頁。

23) 山本・今野『(II)』、190-191頁。

24) 開校50周年記念式典会編集・発行『神戸小学校50年史』昭和10年、501-2頁、山本・今野『I』220頁。

25) 『神戸市教育史』、856-857頁。

26) 『神戸市教育史』、887-888頁。

27) 『神戸市教育史』、852-853頁。

興のための情・意の陶冶の重視と郷土的材料の活用の勧めが、愛国心に繋がる情操形成のための学芸会の重視と節句の学校行事化を促進したのである。因みに、京都教育大学教育学部附属桃山小学校の改正「附属小学校要覧」には、学校節句実施の目的が次のように記されている。「(学校節句(「ひな祭」「武者祭」「七夕祭」)は) 児童生活ヲ豊富ニシ且ツ国民的情操ヲ養フタメニ学校節句ヲ行フ」²⁸⁾。

このような時勢の変化もあって、昭和初期のこの時期から、学芸会とくに大学芸会が雛祭や地久節に行われることが多くなる。雛祭や地久節の時期は、卒業生を送り出し、学年末を締めくくる時期であるとともに、農閑期であることから農村においては保護者の参集を呼びかけるのには最適の時期だったのである。このようにして学芸会は学校内のみの祭ではなく、村人の参加する村祭の性格を持つようになり、11月3日の明治節に行われることが多かった運動会とともに、村の物日としての2大祭となるのである²⁹⁾。

2 レコード童謡

大正期に興隆した「創作童謡」は、昭和期に入ると急速に衰退し、替わって登場したのが「レコード童謡」であった。「レコード童謡」とは、「主としてレコード会社の企画によって製作され、レコードで初公開された童謡を指」すが、「レコード童謡」は、折から興隆したレコード産業にのり、また当時急速に普及したラジオ放送によって急速に広まった。しかし、大正期の童謡が、子どもの生活や感情に根ざした芸術的な歌曲を創作する「文化運動」であったのに対し、「レコード童謡」は、売れることを重視した「営利目的」であり、その分、親しみやすく、歌いやすい歌が多い反面、それが優先されて、オノマトペや反復表現の多用など表現の固定化も目に付く。これは詩としての童謡の評価を落とすものではあるが、昭和初期の童謡衰退後、文学性に傾斜して子どもから遊離しつつあった童謡を、子どもが歌うことができる歌として再生するためには、このような大衆性が必要でもあった。レコード童謡は、昭和

5年から昭和14年までの間に、平均して少なくとも毎月5～7点の童謡レコードが発売されていた。詩人では、武内俊子、久保田宵二、加藤省吾、山上武夫、作曲家は河村光陽、佐々木すぐる、海沼実、山口保治などが活躍した。レコード童謡では、少女歌手を起用したこともあって大衆の人気を集めたが、その絶頂期は昭和11年から昭和16年頃までであった³⁰⁾。その代表的な曲は次のようなものである(会社名のある曲の年次はレコードとして発売された年を示す、また会社名を次のように略す。ポリドールレコード=㊸、キングレコード=㊹、ビクターレコード=㊺、コロムビアレコード=㊻)。

「嬉しい雛まつり」^㊸、昭和11年、サトーハチロー作詩、河村光陽作曲、「かもめの水兵さん」^㊹、昭和12年、武内俊子作詞、河村光陽作曲、「赤い帽子 白い帽子」^㊺、昭和13年2月、武内俊子作詞、河村光陽作曲、「可愛い魚屋さん」^㊻、昭和13年3月、加藤省吾作詞、山口保治作曲)、「お猿のかごや」^㊸、昭和14年、山上武夫作詞、海沼実作曲、「仲よし小道」^㊹、昭和14年、三苦やすし作詞、河村光陽作曲、「ナイショ話」^㊺、昭和14年、結城よしを作詞、山口保治作曲、「汽車ポッポ」^㊻、昭和15年、富原薫作詞、草川信作曲、「あの子はたあれ」^㊸、昭和16年、細川雄太郎作詞、海沼実作曲、「めんこい仔馬」^㊹、昭和16年、サトーハチロー作詩、仁木他喜雄作曲、「たきび」昭和16年2月、JOAK ラジオ幼児番組「歌のおけいこ」で放送、巽聖歌作詩、渡辺茂作曲、「お山の杉の子」昭和19年、日本少国民文化協会募集「少国民歌」第1席入選作品、吉田テフ子作詞、佐々木すぐる作曲。

ところで、昭和初期の学芸会において童謡はどの程度歌われたのだろうか。学芸会の内容と童謡との関わりを事例に則して見ることにしよう。

3 学芸会の内容と童謡

①京都市立初音小学校の昭和3年11月24日の昭和天皇「御大礼奉祝学芸会」のプログラムは、24番組あり、その内訳は、斉唱、童踊、お話、話唱、童劇、朗読、独唱の7種類で、劇が童劇として6あ

28) 『京都教育大学教育学部附属桃山小学校80周年記念誌』昭和63年、137頁。

29) 「(昭和10年前後の) 学芸会が皇室行事、国家行事をトして開催されるのみでなく、ひな祭や天神祭をトしているということは、民衆のフォークロア的部分、民衆の日常生活の意識を、巧みに操作したことを意味している」。山本・今野『(II)』、192頁。

30) 以上の記述は、主に畑中圭一『日本の童謡 誕生から90年の歩み』、平凡社、平成19年、271-280頁を纏めたものである。

る。童謡は、斉唱しゃぼん玉、童踊団栗ころゝの2曲である³¹⁾。(下線は引用者、以下同じ)

②昭和初期に次のような雛祭の行事の記録がある。

「雛祭(3月3日)(子供達が持ち寄ったお人形さんに米国のお人形さんも加へてお話や唱歌や劇などをする)」(岩手県稗貫郡大迫尋常高等小学校「訓練施設と行事」³²⁾)。雛祭に米国の人形が加った事情は次のような経緯による。大正12年9月1日の関東大震災に際し、世界各地から被災地の東京に物資や義援金が届けられた。アメリカからも大きな義援金が送られた。その返礼に団長を本居長世として、宮城道雄、吉田晴風、本居の幼い娘2人からなる民間の遣米音楽団が組織された。音楽団はハワイとサンフランシスコなどで「青い目の人形」などを公演し、すでに排日運動が起きていたアメリカで日米親善に役立った。昭和2年、3月3日にアメリカから約1万2000体の青い目の「友情の人形」が送られてきた。これは日系人の排斥運動に心を痛めたギュリック博士の呼びかけと、日本側では渋沢栄一が中心になり、文部省も協力して実現した国際親善の願いを込めた送り物だった。人形には1体ずつパスポートがつけられ、名前と目と髪の色が書かれていた。これらの「青い目の人形」は、日本全国の幼稚園や小学校に送られて大歓迎された。この「友情の人形交流」は人々の関心を集め、人形を運んできた郵船サイベリア丸の入港、東京での歓迎式典などは、新聞に写真や記事が満載された。このお返しとして日本からも日本人形58体がアメリカの子どもたちに送られた。以上が、岩手県の高等小学校での「米国の人形」を加えた雛祭の背景である。このような雛祭は、人形の寄贈を受けた全国の幼稚園や小学校で見られたもので、このときには当然童謡「青い目の人形」が歌われたに違いない。しかし、この国際的な催しも、昭和16年に日米間の戦争が起こると、青い目の人形は敵国の象徴として廃棄するよう軍から命じられたのである³³⁾。

③昭和2年京都市立春日小学校の学芸会の演目は、

「童謡 てるてる坊主」「童踊 紅緒のぼっくり」「唱歌遊戯 木の葉」「唱歌 田家の秋・蟻の船頭」などである³⁴⁾。

④昭和3年の東京関口台町小学校の学芸会の演目は、昭和3年になってもまだ劇が中心ではなく、「対話」や「お話」「唱歌」が中心である。32の演目中、唱歌が5曲あるが、いずれも教科書外の歌である。唱歌遊戯や対話唱歌も教科書掲載の歌ではない。童謡はないが「対話」に「お山の大将」がある³⁵⁾。

⑤大正12年から昭和4年ごろの長野県上田市丸子中央小学校での童謡の歌唱

「そのころ私たちは学校で白秋の童謡などをずいぶんと歌ったものでした。『赤い鳥小鳥 なぜなぜ赤い 赤い実をたべた』このうたは、たしか小学校へ上がった年受持ちの女先生に初めて教えられた童謡で私たちが白秋の詩を知ったのはじめてでした。それから高学年への数年間、先生は替わりましたが『ゆりかごのうた』『すかんぼの咲くころ』『南の風が吹くころ』『待ちぼうけ』『砂山』『この道はいつか来た道』『からたちの花』と白秋から雨情、露風、八十などと次々と教えられて歌い続けたものです。」小山田仁(昭和4年卒)³⁶⁾

⑥昭和2年から8年ごろまでの岡山県勝茂尋常高等小学校での童謡の歌唱

(唱歌の授業でうたう歌は文部省唱歌が主だったが、教科書はなかった。)履修についてはあまり制約がなかったようで、この歌に、大正デモクラシーの新しい教育運動によって流行した童謡が加わった。特に中高学年の女の子は、情緒的なこの傾向の歌の方が好きらしく、教師もそれを心得てか、よく北原白秋や野口雨情、西條八十の作詞による歌をうたわせていた。(中略)4年の時、ある唱歌の時間に教師が新しい歌として出したのは落谷虹児の「花嫁人形」だった。これは日頃母や姉がよく歌っているのを聞いて知っていた。竹内途夫(昭和2年入学)³⁷⁾

⑤⑥の事例は、学芸会の事例ではないが、昭和初

31) 『初音』48-49頁。

32) 小原国芳『日本の新学校』玉川大学出版部、昭和5年、85-86頁。山本・今野『I』461頁。

33) 合田道人『童謡の秘密—知ってるようで知らなかった』祥伝社、平成15年、162-166頁。松浦良代『本居長世 日本童謡先駆者の生涯』、国書刊行会、平成17年、197-283頁。閉校記念誌『本能—輝ける124年のあゆみ—』京都市教育委員会編集・発行、平成9年、54頁。

34) 春日小学校写真帳(京都学校歴史博物館所蔵)。

35) 山本・今野『(II)』、189頁。

36) 『丸子中央小学校百年史』438-439頁、山本・今野『(II)』、204頁。

37) 竹内途夫『尋常小学校ものがたり』平成4年、第4刷、福武書店、121頁。

期から昭和7年頃までは田舎の公立小学校においても童謡が盛んに歌われていたことを示すためにあげた。⑥の文献には、唱歌会が盛んに行われていたことが記されている。唱歌会のプログラムは確認できないが、この記述から当然童謡が歌われていたものと思われる。

- ⑦昭和7年神奈川県小田原第1小学校では、毎月1回各学年ごとに唱歌会を行った。会場は講堂や運動会があてられた。その時のプログラムは、唱歌もあるが、教科書外の歌も数多く歌われている。童謡は少なく9月17日の第4回で尋1が「お山のお猿」を歌っている。ローレライもあり、また旅順開城、近衛騎兵といった軍歌もあるが、全体的には軍事色は強くない³⁸⁾。
- ⑧昭和9年2月17日、京都市立滋野小学校講堂で行われた第2連合小学校長会主催の第3回児童唱歌会の曲目には童謡はない³⁹⁾。
- ⑨昭和9年12月13日、神戸尋常小学校開校50周年記念学芸会順序には、番外も含めて31番組中、歌が11番歌われている。形態は斉唱、独唱、合唱で、唱歌や「乃木将軍」「非常時日本の歌」「爆弾三勇士」「観艦式」「日本国民歌」などの他に、「靴が鳴る」「雀の学校」「花嫁人形」が歌われている⁴⁰⁾。
- ⑩東京関口台町小学校、昭和10年のプログラムは劇が一番多く、ついで唱歌が多い。童謡はなく、童謡として「あわて床屋」が2番ある。「唱歌」は、「兵隊さん」「東郷さん」「昭和の子供」「我が国兵士」など、戦争と関わる曲目が増えている⁴¹⁾。
- ⑪昭和10年11月15日の京都市立中立小学校の学芸会プログラムに、4女子による斉唱「シャボン玉」(「しゃぼん玉」)がある⁴²⁾。
- ⑫福島県鶴城小学校の昭和10年2月開催の学芸会プログラムには、童謡はなく、合唱爆弾三勇士が歌われ、劇「水兵の母」が演じられていて、戦時色が強くなっている⁴³⁾。
- ⑬京都市立初音小学校で昭和11年11月12日から14日

までの3日間、明治天皇のご来校60年を記念して、2日目に行われた「児童学芸会」のプログラムは、唱歌、対話、図画、読方、劇、唱歌劇、遊戯、理科の8種目で劇が唱歌劇も含めて6となっている。19番組中、劇、対話、唱歌劇が9つ、唱歌6つ、凱旋、入営を送る、ポプラ・子供の兵隊、祝い日、みかん山、太平洋、遊戯に朝道小道で、童謡は見られない⁴⁴⁾。

- ⑭昭和12年11月25日の京都市立中立小学校の学芸会・試演会ならびに11月27日の敬老会の番組(敬老会の番組は学芸会・試演会の抜粋である)には、両方に1忠数名(忠はクラス名)による唱歌遊戯「夕日」と2年数名による唱歌遊戯「かもめの水兵さん」がある。ところが京都市立中立小学校の昭和13年と14年の学芸会には、童謡はない⁴⁵⁾。「かもめの水兵さん」は、発売されるとベストセラーになり、渋沢二夫などによって児童舞踊の振付がなされ、運動会や学芸会の演目として人気を集めた⁴⁶⁾。
- ⑮昭和14年9月開催の小田原第1小学校の学芸会の演目には、唱歌として新鉄道唱歌、ヒットラユーゲント他、唱歌として「シャボン玉」(「しゃぼん玉」)がある。また、日の丸行進曲(遊戯)、空の勇士(唱遊)、川中島(剣舞)愛国行進曲(舞踊)などがあり、(唱遊)として「動物園で、赤い帽子、白い帽子」(これは「赤い帽子白い帽子」であろう)がある⁴⁷⁾。
- 昭和6年に満州事変が起こり、軍国主義的傾向が強くなるが、昭和12年ごろまでは、まだ軍国主義一色ではなかったこともあって、童謡が歌われている。昭和4年には、文部省が「認可歌曲総目録」として136の歌曲を示しているが⁴⁸⁾、その中には「雨」「あわて床屋」「お山のお猿」「金魚の昼寝」「靴が鳴る」「黄金むし」「雀の学校」「背くらべ」「どこかで春が」「団栗ころころ」「夕焼小焼」「揺籠のうた」など多くの童謡が入っている。このことは昭和4年ご

38) 山本・今野『(II)』、211-214頁。

39) 春日小学校写真帳(京都学校歴史博物館所蔵)。

40) 『神戸小学校50年史』昭和10年、598頁。

41) 山本・今野『(II)』、189頁。

42) 京都学校歴史博物館所蔵春日小学校写真帳による。

43) 山本・今野『(II)』、191-192頁。

44) 『初音』平成9年、48-49頁。

45) 春日小学校写真帳(京都学校歴史博物館所蔵)。

46) 上笙一郎編『日本童謡事典』東京堂出版、平成17年、105頁。

47) 山本・今野『(II)』、191-192頁。

48) 東京高等師範学校附属小学校初等教育研究会発行『教育研究』第348号、昭和4年10月1日号、146-148頁。

ろには、これらの童謡が学校でも公認の、いわばスタンダードナンバーになっていたことを示している。しかし、昭和7年に『新訂尋常小学唱歌』、昭和10年に『新訂高等小学唱歌』が文部省から発刊されると、学校現場では、これらが準国定教科書扱いされたため、両書の発行後、学校での歌の教材選択の幅が狭くなり、童謡の入る余地が少なくなってきた。上記の事例のように、昭和14年ごろまでは童謡が歌われているが、④に見られるように京都市立中立小学校の学芸会から童謡が消えたのが、昭和13年からであるから、この年が大きな転機になったことが分かる。事実、昭和12年7月7日に盧溝橋で日中両軍が衝突して日中戦争が始まり、昭和12年末には、日本軍が南京を占領したこともあって、「日支事變が起つてから「天に代わりて不義をうつ！」と云ふ軍歌が盛んに歌はれ、今では日本全國民の聲となつてしまつた。3歳の童子でも片言交りに「天に代わりて不義をうつ！」と歌つてゐる様な有様である。」⁴⁹⁾ という状況になっていた。そして昭和13年4月には「国家総動員法」が公布されて、これ以後戦時体制に入るのである。戦意を鼓舞せず、軍国主義の時代とは合わない童謡には、厳しい時代がやってきたのである。

4 戦時体制下の学芸会と唱歌会（音楽会）

昭和12年7月の日中開戦後、8月24日には国民精神総動員実施要綱が閣議決定された。これを受けて兵庫県では10月15日に県学務部長が「国民精神総動員実施に関し、教育教化に従事する者の活動に俟つ所極めて大なれば、各学校に於ては左記事項に留意し、斯の運動の実績を挙ぐるに遺憾なき」を期するよう通達した。通達の4に、「体操教練武道ノ振興ヲ図ルト共ニ 修学旅行 運動会 競技会 其ノ他学校ノ行事ニ関シテハ 専ラ堅忍持久 困苦欠乏ニ堪フルノ精神ヲ鍊成スルヲ旨トシテ之ヲ行フコト」とあり、この通達によって神戸市の各校園はいっせいに非常時教育を実施励行したのである⁵⁰⁾。このように、兵庫県だけでなく日本全土が非常時教育に入ったのであるが、これは学芸会の目的や内容にも影響し、昭和14年には、次のような主張がされてい

る。「学芸会は全校を中心としたる全郷土民一致団結の統制的一大デモンストレーションで有るから団体的訓練と協同団結の精神との涵養に努め、特に規律、節度、服従、統制の精神強化の徹底を重視して旺盛なる国民精神力を陶冶する。学芸会の全国に於ける訓育は質実剛健をモットゥとし、堅忍持久、困苦欠乏に耐ふる鍛錬に留意する」（『教材王国』誌昭和14年1月号）ことが学芸会の実践目標とされ、「学芸会の開会、閉会は厳粛に行ひ、国歌斉唱、宮城遙拝、皇軍戦勝祈願の黙禱等を全員一堂で実践し民族意識の振作に努める」（同上誌）ことが強調されたのである⁵¹⁾。昭和16年4月1日施行の「国民学校令」で、教科は、国民科、理科、体錬科、芸能科となり、芸能科は音楽、習字、図画、工作で構成されて、従来の唱歌は芸能科の音楽となり、唱歌だけでなく器楽・鑑賞がとりいられることになった。また、「小学校令施行規則」第1条の6で、「儀式・学校行事等ヲ重シ之ヲ教科ト併セテ一体トシテ教育ノ実ヲ擧グルニカムベシ」とされ、第31条で「各教科及科目の毎週授業時数外ニ於テ毎週凡ソ3時ヲ限り行事、団体訓練等ニ充ツルコトヲ得」とされた。また国民学校令施行規則第14条で「祭日祝日等ニ於ケル唱歌ニ付テハ周到ナル指導ヲ為シ敬虔ノ念ヲ養ヒ愛国ノ精神ヲ昂揚スルニカムベシ 学校行事及団体的行動トノ関連ニ留意スベシ」とされた⁵²⁾。「国民学校令」により従来の「唱歌」が「芸能科音楽」になったこともあって、昭和16年から19年にかけて、8冊の唱歌・音楽教科初めての国定教科書『国民学校音楽教科書』が誕生した。これによってこの教科書掲載以外の曲は、公式には学校では歌えなくなり、学校教育に童謡が入る余地がなくなった。

『長野県教育史』では、戦時下の学芸会について、次のように述べる。「学芸会は、日中戦争が始まるころ衰微の傾向となる。時局の進展とともに、文芸的傾向の行事が軍事的傾向の行事にかわり、また行事数が急増して学芸会を開く余裕がなくなってきたためである」⁵³⁾。これが学芸会の全国的な傾向であったと思われるが、「戦争がたけなわとなった昭和10年代後半にも、なお学芸会を催す学校があったが、上演種目は国家主義的・軍国主義的なものに変

49) 小林つや江「時局と音楽教育」『教育研究』第476号、昭和13年1月1日号、274頁。

50) 『神戸市教育史』、866-867頁。

51) 富田博之「学芸会の歴史」、日本学校劇連盟編『学芸会の事典』、30-31頁。

52) 『長野県教育史』、976-977頁。

53) 『長野県教育史』、976-977頁。

わっている⁵⁴⁾と記されているように、学芸会がなくなっただけではない。昭和15、16年には、「学芸会」に替えて、「学能錬成会」「学芸修練会」と称したり⁵⁵⁾、16年には「興亜少年大会」、18年には「打ちてしまぬ学芸会」と命名した学校もあり⁵⁶⁾、こうした命名からもその内容が推測できよう。

大正期に学芸会から分離独立して盛んに行われた唱歌会については、『長野教育史』に次のような記述がある。「唱歌会は、大正期に学芸会から独立して開かれたが、戦時下には再び学芸会に繰りこまれたものが一部にあった。しかし、概して唱歌会は単独に開かれ、殊に『国民学校令』で、従来の『唱歌』が『芸能科音楽』となって唱歌だけでなく器楽・鑑賞がとりいれられ(略)音楽は情操をとおして愛国心を養い、また団体行動に不可欠なものとなったのである。唱歌会は音楽会と名称が改まり、戦時多端なおりにも、多くの学校で実施された⁵⁷⁾」。しかし、戦時体制下において、音楽会という名称になっても、軍国調の愛国心を称揚する「教育音楽」が主で、演目に童謡が入ることは少なかった(ただ、次に見るように全滅ではないのが興味深い)。

次に、戦時下の学芸会と音楽会の様子を童謡も含めて見ておこう。

①昭和15年12月7、8日、学修発表会、兵庫県東須磨尋常小学校

「時局認識を強調し児童教育に資するため」に遺族、出征軍人並に帰還勇士の家族宛に出された「学修発表会」の案内状には「午後1時から本校講堂に於て児童学修発表会を開き御父兄方の前に児童学修の一端を発表を兼ねて護国英霊の御遺族、出征軍人及帰還勇士の御家族にも御清覧を願ひ度いと存じます(後略)」とある⁵⁸⁾。

②昭和15年9月28日、軍人遺家族慰安学芸会、京都府亀岡小学校
19番組、唱歌4曲(国民進軍歌、隣ぐみ、満州の

お友達、支那のお友達)、遊戯もしくは唱歌遊戯4番(おとぎの列車、日の丸と坊や、兵隊さんありがとう、愛国行進曲)、舞踊(皇国の母)、など⁵⁹⁾。

③昭和16年9月27日 校内学芸会、9月29日、軍人遺家族慰安学芸会、京都府亀岡小学校

18番組、唱歌2番(そうだその意気、学校・海・お馬、唱歌遊戯、兵隊さんよありがとう)、遊戯もしくは唱歌遊戯5番(赤い帽子白い帽子、お母さんとねんね、兵隊さんよありがとう、海の進軍、さくら)⁶⁰⁾。

④昭和17年の長野県丸子国民学校の唱歌会

君が代斉唱から始まり、軍艦、ぼくらのへいたいさん、航空日本の歌、靖国神社、大東亜決戦の歌、そして全員での愛国行進曲、という極めて軍事色の強いものであった⁶¹⁾。

⑤昭和17年頃、3月上旬学芸会、実施要項に「遺家族慰安」とある。埼玉県石原国民学校「軍人援護教育行事一覧表」⁶²⁾。

⑥昭和18年3月6日、地久節 遺家族慰安激励学芸会、京都府伊根町立朝妻小学校⁶³⁾。

⑦昭和19年2月7日 学芸会、京都市立山階小学校
昭和11年卒業生、昭和13年卒業生、昭和18年卒業生が、学芸会の思い出として、「学芸会がさかに行われましたね。戦時色の劇が多かったように思います」などと語られている⁶⁴⁾。

⑧昭和19年の学芸会、愛知県八名郡大野国民学校
プログラムは、25番の演目中、唱歌が8で劇が7。唱歌の内容には童謡は含まれず、教科書の唱歌が多い。○船出、○落下傘部隊、○朝の歌、○オモチャの戦車、体操の歌、○スキー、○船は帆船よ、○ウミ、○タネマキ、羽衣、少年兵を送る歌、校歌である。○は教科書掲載のもの(学年配当の通り歌っている)戦時色が濃くでている⁶⁵⁾。

⑨昭和19年8月24日午後、疎開先での小学芸会、東京小石川区明化校

54) 『長野県教育史』976頁。

55) 日本学校劇連盟編『学芸会の事典』30-31頁(筆者は富田博之)。

56) 石川県鹿島郡鹿島町立越路小学校・同PTA刊、昭和38年、148頁、山本・今野『(Ⅱ)』、193頁。

57) 『長野県教育史 第6巻』、977頁。

58) 山本・今野『(Ⅱ)』195頁。

59) 京都府亀岡尋常高等小学校・亀岡国民学校編『桜が岡復刻合本』亀岡小学校内桜ヶ岡になじむ企画委員会復刻編集・桜ヶ岡になじむ会発行、昭和51年、378頁。

60) 同上書、427頁。

61) 山本・今野『(Ⅱ)』、214頁。

62) 『埼玉教育』第120号、昭和17年11月号、44-6頁、山本・今野『(Ⅱ)』、441頁。

63) 伊根町立朝妻小学校閉校記念誌編集委員会編・発行『朝妻小学校閉校記念誌』平成17年3月、年表、37頁。

64) 山階校創立百周年記念事業委員会編集・発行『山階校創立百周年記念誌 山階』昭和47年、61頁。

65) 山本・今野『(Ⅱ)』、194頁。

5年生ハーモニカ「月月火水木金金」、3年女子遊戯「仲よしこよし」（「仲よし小道」のことであろう）、3年男子劇「青君の出せい」、6年女子 独唱、4年女子 遊戯、3年男子 ほんおどり、舞踏（単独女子）「父よ、あなたはつよかった」、6年ハーモニカと歌、「なの花鳥」、5年女子 歌、4年男子歌⁶⁶⁾。

⑩昭和19年8月24日午後、疎開先での第1回演芸会
東京小石川区林町小学校

番組の中に遊戯 メンコイ子馬（「めんこい仔馬」）遊戯 お山の猿、遊戯「魚やさん」（「可愛い魚屋さん」を使用したものであろう）がある⁶⁷⁾。

⑪昭和19年10月5日夜、疎開先での第2回演芸会
東京小石川区林町小学校

番組の中に遊戯 メンコイ子馬（「めんこい仔馬」）歌 かもめの水兵（かもめの水兵さん）歌 月の砂漠（寮母による歌）がある⁶⁸⁾。

⑫学芸表現会、唱歌練習会（音楽会）、徳島県撫養小学校

学芸表現会を年間定例行事として、昭和8年から11月まで2月、昭和12年から14年まで3月上旬、昭和15年から22年月まで2月実施、昭和18、19年中止。また唱歌練習会（昭和2年から音楽会）を年間定例行事として、大正14年から昭和8年まで7月下旬実施、さらに学期行事として音楽会を昭和4年から昭和14年まで実施⁶⁹⁾。

⑬ピアノ音楽会 長野県開智国民学校 昭和19年12月17日

管弦楽、ピアノ独奏、リュート独奏、バイオリン独奏（以上曲目省略）、独唱として、「初等科音楽」「ウタノホン」から6曲、独唱と管弦楽で「突撃ラッパ鳴り渡る」「空の神兵」が、管弦楽と斉唱（全員）で「軍艦行進曲」「愛国行進曲」が演奏されている。童謡はない⁷⁰⁾。

以上の事例から、学芸会は、戦時下においても実施回数の減少や中止という困難を伴いながらも持続的に開催されており、戦争末期の学童疎開先においても実施されるほどの根強い人気があったことが分かる。戦時下における学芸会開催の趣旨は、戦意の

昂揚と銃後の守りの徹底、国家や皇室への崇敬の念の育成と愛国心の啓培であったが、その反面、学芸会は、児童の成長を披露するハレの舞台であるとともに、戦死した遺族への慰藉や村落での物日としての娯楽でもあったことが、学芸会の根強い人気の秘密であろう。戦時下の学芸会や学童疎開先での学芸会においても、童謡の歌唱、演奏、童謡の演目がごく少数ではあるが入り込んでいる。このことは、童謡については、無邪気なもの、教訓的なもの、軍国的なものについてはお咎めがなかったとともに、学校教育における学芸会の位置づけが、教科としての唱歌や儀式用唱歌よりも低かったゆえに監視の目が緩かったことを示している。

おわりに

昭和初期には「レコード童謡」の隆盛もあって、童謡は学芸会ならびに唱歌会（音楽会）において盛んに歌われている。しかし、日支事変以降は、時局にふさわしくない歌や音楽を排除する傾向が強くなり、童謡には分が悪い時勢となる。学芸会の全国的普及は学校劇の導入によるものだが、それも13年ごろがピークで、太平洋戦争勃発後は回数が少くなり、その内容も時局を反映して戦時色の強い演目を中心にになる。それでも学芸会には、戦争と直接関係のない演目もあったので「学芸会は国家色軍事色にぬりつぶされたなかで、残された数少ない児童・生徒の文化的活動の催しの性格が一面にあった」⁷¹⁾ ことも事実であった。以上のように、教訓臭の強い文部省唱歌への反発から児童中心主義教育と芸術教育重視の風潮にのって大正期に興隆し、昭和初期に「レコード童謡」によって大衆化した童謡は、昭和8年頃から徐々に、そしてとくに昭和13年頃からの戦時体制下になると時代に合わない歌になっていった。こうして学校教育における音楽とくに歌曲は、子どものための歌であることをやめ、再び「文部省唱歌」と軍歌の時代にもどるのである。童謡の復興は、教科書に童謡が採択され、「レコード童謡」が人気を博する、第2次世界大戦敗戦直後まで待たなければならなかったのである。

66) 島田雅編『泣くもんか—疎開学童たちの記録』サンケイ新聞社、昭和44年、130-131頁。

67) 島田雅編、同上書、128-129頁。

68) 島田雅編、同上書、131-132頁。

69) 徳島県『撫養小学校沿革史』147-62頁より作成、山本・今野『(Ⅱ)』、194頁。489ならびに493頁。

70) 佐藤秀夫編『日本の教育課題』第5巻 学校行事を見直す 東京法令出版、平成14年、713頁。

71) 『長野県教育史』、977頁。